

でも大丈夫という自己信頼につながっていくのです。そうして体験する世界は魅力的なものに感じることでしょう。キーパーソンにいろいろな報告をすることで意欲の基盤はさらに強く形成されていきます。学習やさまざまな活動はこうして飛躍的に改善、向上していくのです。

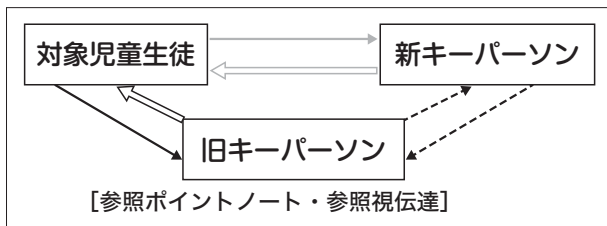
第4フェーズ：自立のための支援

★自立支援のフェーズが必要な理由

愛着修復プログラムARRPRAMは、キーパーソンはしっかりと交替できることを意識して作成しました。キーパーソンになった教師がずっと卒業までキーパーソンをしなければならぬと思ってしまうと、引き受け手がいなくなります。また、転勤等でいつキーパーソンを替わらないといけない事情ができるかもしれません。ですから、一年交替可能を実現しました。

また、キーパーソンがいつも一緒にいることができない学校・幼稚園・保育所では（もちろん、子どもが大きくなれば、いつも一緒にいる必要はないことはすでに指摘した通りです）、キーパーソン経験者が数名いることは、対象児童生徒にとっては、かえって安心できる体制となります。次節で、こうした支援成功のためのコツを紹介しますが、複数のキーパーソンが一番手、二番手

図2-5 キーパーソンの立ち位置④



というように順位づけられて存在する体制は、安心の体制なのです。

キーパーソンの交替を可能にするには、キーパーソンが交替しても、安全基地・安心基地・探索基地機能に大きな影響を与えない工夫が必要です。それが第4フェーズの自立支援です。

★「参照ポイントづくり」

キーパーソンと完全密着して基地機能を形成してしまうと、キーパーソンがいればできるけれど、いなくなったり交替するとたちまち基地機能は崩壊してしまうことになります。したがって、第3フェーズで指摘した「参照ポイントづくり」とは、キーパーソンがいなくなっても、キーパーソンが交替しても、その認知・行動・感情のセット行動がいつもできるために、「自分の中に参照できるポイントをつくる作業」です。

例えば、適切な行動では「こうすればこうなって嬉しい」から「いつもしよう」、不適切な行動では「こういうとき、こうすれば、こんな嫌な気持ちになる」ので「しないでおう」というパターン学習をキーパーソンと確認しながら実施していきます。

この確認作業の中で、キーパーソンがいなくても「こういうと

きは、こうすればいい」というパターンが習得できるのです。そして、「それができるための条件は何か」という条件意識もはぐくむことが大切です。

★受け渡しの儀式

最後に一番大切なのは、今まで担当してきた旧キーパーソンと対象児童生徒と、次年度、担当することになった新キーパーソンの三者で「受け渡しの儀式」をすることです。子どもが知らない間に旧キーパーソンが消えていて、突然、新キーパーソンが担当する、というような事態は絶対、避ける必要があります。

旧キーパーソンと対象児童生徒は、新キーパーソンの前で、「こんなときには、こうすればできる」「こんなとき、こうしてしまうので、こうして防ぐ」という参照ポイントを披露してみせるのです（図2-5）。

参照ポイントは数が多くなれば、小学生中学年以上なら、「参照ポイントノート」としても呈示できます。小さいこどもの場合は、「こうだったよね」と二人で実演することで参照視伝達します。

この儀式があれば、対象児童生徒は、新キーパーソンの前で、この人はどんな人かと不安になって愛情試し行動をする必要はなくなります。新キーパーソンも年度当初、「この子はどんな子だろう、これをしてもいいかな、こうするとよくないかな」と手探りの支援をしなくてすむのです。